

## 発展的評価項目＜独自評価項目＞

～事業所におけるサービスの質の向上のためのシステムについての評価結果です～

事業所名： 川崎市中央療育センター

取り組み	未就学児童の平日日中プログラム	取り組み期間	5年6月～ 6年3月
------	-----------------	--------	---------------

PDCA	取り組みの概略
<b>「P」 目標と 実践計画</b>	<p>今まで学齢期前の入所児童が少なく、平日の日中はセンター内で漫然と生活を送ることが多かった。職員の手が空いているときにその日、その時で散歩や屋内娯楽を提供していた。そこで、長期目標に「取り組みを有機的に構成し、実施していくなかで、一つのプログラムとしてフラッシュアップし、今後同様の状況（どこにも所属できない未就学児童が入所してくる）に際して、運用できるモデルを作る」、短期目標に「各未就学児童に集団行動に向けてのソーシャルスキルを培う。一定時間椅子に座って取り組む、返事をする、順番を待つ、体力をつける等、練習していくことで、社会性を身に付け、小学校の入学に向けて備える。日中の通所先がなくともメリハリのある生活を送れるようにする」を置き、取り組みを実践した。</p>
<b>「D」 計画の実践</b>	<p>具体的な取り組みとして、平日の月曜日と金曜日の午前をプログラムの日として設定する。通園経験者、保育士を中心に担当職員を立て、時間割りに沿って支援する。 【流れ】はじまりの挨拶⇒座っての出席・お楽しみの時間⇒休憩⇒動の時間（体を動かす、散歩等）⇒水分⇒静の時間（机上課題）⇒おしまいの挨拶。 必要な用具・道具（活動に使う資材を含む）を準備する。遠足、外食等、特別な日も月に1回程度設定する。</p>
<b>「C」 実践の評価</b>	<p>継続、習慣化を目指したが、子どもの体調不良の対応などで、週2回月8回、コンスタントに行えた月はなかった。また、職員の活動への理解度にどうしてもムラが生じ、活動について一貫性や一定の質が担保できていたとは言い難い。3名の児童にしっかりと取り組み活動の定着を目指すには、マンツーマン体制が必要であり、人員不足から内容の質が落ちてしまう日もあった。遠足や外食などのイベント的なものは複数回実施した。ただし、一連の流れを反復していく中で、子どもたちの中にも何をするのかイメージが付き、椅子に座って絵本を聞いたり、名前を呼ぶことに応じられたりする様子も少しずつ見られてきており、一定の変化、適応、成長はみとめられた。</p>
<b>「A」 結果と 改定計画</b>	<p>該当する児童がいなくなったことで取り組みは終了したが、再び対象となる児童が入所してきた際には継続（再開）していく。内容については、更なるマニュアル化を行うとともに、ツールの充実化を図る。簡易で良いので活動内容、児童の様子を記録し、引き継ぐことで積み重ねができるようにフォーマットを用意する。実施スケジュールの管理、優先の徹底化の形を再度検討する。</p>

### ＜第三者評価コメント＞

今回の取り組みで成果もあがっている。対象となる児童が入所してきた際には、取り組みを継続（再開）することとしており、今後の発展に期待する。

## 課題抽出項目＜独自評価項目＞

～内容評価項目について、次への取り組みを事業所が検討した結果です～

事業所名： 川崎市中央療育センター

内容評価項目の＜A5:利用者の意思を尊重する支援としての相談等を適切に行っている＞を取り上げ、今後の具体的な取り組みを検討した結果です。

### 事業所による取り組み

内容評価項目＜A5:利用者の意思を尊重する支援としての相談等を適切に行っている＞	自己評価の内容	＜現在の状況＞ すべてのケースにおいて個別支援計画の作成をはじめ、支援を組み立てる際には、根幹部として必ず本人（及び家族）の意向を聞き取り、それをベースに据えている。また、ユニットやケースの特性にもよるが、内容評価の自己評価に加え、評価項目に関する取り組みとして以下のものを例示する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・合議制～定期的に話し合いを開催。職員複数名によって児童からの要望を受けとめ、現状叶えられるもの、それへの道筋、一方で難しいものについても、しっかりと伝える場としている。</li> <li>・子ども会議～施設でのイベントや生活の在り方等を、職員から一方的に提示するばかりでなく、子どもの主体性のもとで、大人と子どもが協力して一緒に組み立てていく。</li> <li>・アルバイト等の（所謂難度高めの）社会参加～児童の生活課題や施設ならではの枠（門限、ルール等）にばかり捉われることなく、正の強化子の一つとすべく、一定柔軟に相談しながら、進めていく。能力的に難しい児童も、時には法人内から活用できる資源を模索し、実現を目指す。</li> </ul> ※「相談」とは異なるが、意思、意向発信の場の一つとして意見箱が設置されているものの、子どもも職員も存在を把握している者が少なく、形骸化して機能しているとは言い難い。
	自己評価で気づいたことについての今後の具体的な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意思決定の前段階として、意向を発信できるように、子どもたちそれぞれに伝わる形、伝わる言葉、センターについて、これからの生活について、説明する場を作ることを、一つの慣習とする。</li> <li>・合議制や子ども会議は限定されたケース、ユニット個別で実施されている取り組みであるため、相互に紹介したり参考にしたりする等して、多様性ある相談、意向聞き取りの形を整えていく。</li> <li>・年少児童や重度の方についての聞き取りの難しさ（大人たちの発信の難しさ）から、相談の形に苦慮する、或いはそもそもそういったものが行われにくい傾向がある。丁寧な説明や、意思を引き出す形を施設総体で検討し、実施していく必要がある。⇒次月、権利擁護や意思決定支援に関する研修があり、そこでそれに関する理解を深め、手法を学ぶことを目指したい。</li> </ul> ※意見箱の存在について、改めて広く、日常的に身近なツールとなるように周知するとともに、気軽に書き込めるものに作り替える。子どもと一緒に作るのも一つ。

### ＜第三者評価コメント＞

利用者の意思を尊重する支援としての相談等を適切に行っている点について、今後の具体的な取り組みを決めている。取り組みの成果に期待する。